

サーキット・ライダー 2003年 3月号

バリアー・フリー：差別偏見を無くす

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれかが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人たちに現れるためである…。」ヨハネ 9：1－5。

3月5日の灰の水曜日から復活祭までの7週間、40日間（日曜日を除く）は苦難節になります。この期間、イエスの十字架、そして復活までの道のりを茨の40日に譬えて、それを偲び、「イエスの苦しみは我が身のため」と自覚し日頃の罪を悔い改め、身を低くして歩むとしています。苦難、不幸ということを考えるに、病気、肉体的或いは知的障害（良い言葉が無いのでこの言葉を遣います）、仕事が無くなり生活に困る、愛する人を亡くす、人間関係で傷つく等々を思い浮かべる方が多いのではないかと思います。そこで「病気、障害、或いは悲しみや苦しみは即ち不幸か？」と問い掛けて見ると、果たしてそうだろうかと思えます。勿論、それら諸々は経験しないですむなら、それに越したことは無いと思うのが人情でしょう。しかしだからと言って、今、そのような状況にある人たちが不幸だと思い、憐れみの目で見るのは正しいとはいえません。本人が悲観して不幸に思う場合もありますが、むしろ人を不幸にしてしまうのは多くの場合、他者の思いやりのない態度、考えではないかと思えます。

昨年のクリスマスから今年の初めにかけて3週間、日本から全英米（チョン・ヨンミ）さんがパークリッジに来られました。その間、教会員の荒美俊三、和子兄妹、松尾孝恵姉、ドリス・ホワイト姉、ウィル、メイ・スミス兄妹のお宅にホーム・ステイし私たちと交わりを持たれました。それらの兄弟姉妹にはこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。全さんは現在、韓国から日本に留学し、ご自身、全盲であることから目の不自由な方たちの為のバリア・フリーを研究しており、その研究の調査でアメリカに2ヶ月ほど来られました。ワシントン DC、ニュージャージー、カリフォルニアを一人で精力的に回り研究をしている彼女から実に多くのものを学ばせていただきました。バリア・フリーと聞くとなんだか、目が見えない方たちの為に障害物を無くし、階段や至る所に凹凸のある印を付けたり、音が出る装置を付けたりと思いますが、実は人々の心に潜む、差別や偏見、また障害を持っている人たち自身が克服しなければいけないコンプレックスや被害者意識などの心の壁を無くすことを言うのだそうです。私たち健常者（この言葉も？ですが、適語がありません）は体の不自由な方、知的、精神的障害を持っている方を何となく別な存在として意識し（無意識のうちに）見て或いは関わっているのではないのでしょうか？彼らがどういう思いで日々過ごしているかを全く知ろうともせず。単に同情したり、辛いだろうなと思ったり。

全さんは4歳の時に病気で失明したそうですが、目が見えないということを全く苦にせず、訪問先で杖もつかず、ささっと歩き、明るく笑い思わず「本当に目が見えないのかしら？」と思ってしまうほど自由闊達に動き回っていました。現在、東京大学博士課程に在籍し、卒業後は同じような立場の人たちの、また一般社会の向上の為、指導にあたりたいと考えています。そんな彼女は自分も不幸だなどと思ってもいないし、短い間ですが、交わりを持った私たちも彼女が目が見えない故に不幸だとか、かわいそうだとは微塵にも思いませんでした。勿論、目が見えないことからくる不自由さ、生活上注意しなければならない点は多々ありますし、それは伺い学びましたが。

人を不幸にしてしまうもの、悲しみ、苦しみに打ちのめしてしまうもの、実はそれは人の心に住む、差別偏見なのです。イエスの弟子たちがイエスに問いかけました。本人の罪か親の罪かと。因果応報という古い慣習に捕らわれた思いこそが、目の見えない人を不幸にしていたのですが、弟子たちはそれが分かりませんでした。イエスはそれに対して「誰の罪でもない。神の業が現れるためである。」と宣言しました。この後この話は奇跡の物語へと展開しますが、この話の本当の意味は「奇跡がある無し」ではなく、人々の心に巣くう差別偏見の排除であり、キリストによる真の解放、自由、罪の許し、そして人として立つということではないかと私は思います。人を不幸にするのは病気や障害、諸々の経験ではない。他者の心無い言葉、態度、そしてそれによって影響を受けてしまう本人の思いです。本当のバリア・フリーの実現の為にイエスは苦しみを負ったのではないのでしょうか。

吉松 純